

---

# 「妻へ贈る逆バレンタインデー」

ドリーム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「妻へ贈る逆バレンタインデー」

### 【Nコード】

N1532G

### 【作者名】

ドリーム

### 【あらすじ】

定年も間近に迫った中年社員が退職を決意した。家庭を振り返ると、そこに妻の存在の大きさを知る。

不景気と囁かれるようになって、もう何年になるのだろう。

私見たいな古参の社員になると例え役員と云えども、いや役員であるが故、少しでも経費削減

に協力しなくてはならないだろう。私は62才で役職は現在取締役の付かない部長である。

長年世話になった会社だが、取締役員の道も残されてはいるものの不景気の昨今希望も薄い。

定年まであと3年ある。だがここで潔く退社すれば、惜しまれつつ退社した事になる。

それともうひとつ理由がある。妻と結婚して早33年、私を長年支えてくれた妻への恩返しをしようと考えていた。

「ねえ貴方、本当に退職なさるのですか？ 希望退職者を募集している訳でもないのでしょうか」

それなら定年まで………」

「ああ、専務には引き止められたよ。でも間もなく希望退職者を募集する事になっている。誰も

が喜んでそれに応じる人は居ないだろう。だから私が手本を示し事にした。部長の私が率先して

退職する事で、会社に最後の貢献が出来るし、これでいいのだ」

「そう、貴方は言い出したら引く事を知らない人だから。長い間ご苦労さまでした」

「まあ、そう深刻になる事はないよ。辞め方としては辞めると迫られるより自ら身を引いた方が

互いに気持ちいいものさ。ところで昨日は俺達の結婚記念日じゃなかったか？」

「あら？ 覚えてらしたの。結婚して10年くらいはお祝いや旅行したものですけどね。30年以上過ぎるともう・・・それに娘も嫁いで、家庭でこれと言った行事も無くなつたわね」

「いや、もうひとつ大きな行事が残っているじゃないか」

「ああ、それって健太郎のこと？」

「そうだ。あいつも31になるだろう。あいつには彼女は居るのか？」

「それが、あの子まったく秘密主義なんだから。でも居ないわよね。覚えている7年程前かな身なりをピシッと決めて、鼻歌を歌いながら休みの日に出かけた事を」

「そんな事があつたなあ。でも別れたんだろう。あの時は見てられなかった。確かその彼女一人でオーストラリアに行ったんだろう。あいつは携帯電話を新しく買ったんだよな。番号が変わるのが嫌なのか、新しい携帯の番号と古い携帯の番号と二つ持っていたなあ」

「ええー気の毒なほど落ち込んでいて、それでも携帯番号を変えたら彼女との最後の糸が切れる事を恐れたのね。それ以来、秘密主義になつて」

「ああ、あれ以来、会社を代えて事も何も言わなかった。失恋してから会社を辞め暫くアルバイトをしていた事があつたなあ」

「ええ、貴方が叱つたのよね。いつまでバイト生活しているんだあてっね。そしてある日だった

かしら、知らない人から電話が掛かってきて。店長居ますかと言われて、あの・・・店長って誰で

すか？ 間違いじゃありませんかと訊いたら賢太郎の事だったのね」  
「そうだったな。知らぬ間に社員になって大きな店の店長まで任せて貰って、俺達二人で涙を流して喜んだものだな」

妻と想い出話して数日後、私は家族にとってどんな存在だったのだろうかと振り返った。

妻も息子も娘もそれぞれ苦勞もあつただろう。私は自分の苦勞話ばかりを家族にぶつけていたような気がする。何かと云えば、お前達は誰のお蔭で生活出来ているんだと怒鳴った事が何度もあつた。妻だつて貴方だけが苦勞していると思つているの、と言いつ返したかつた事だろう。

退職したら妻の為に何かをしてあげたいと思つていた。

だが不器用な私はどんな事をすれば妻が喜んでくれるのか、全く分からなかつた。

そんな時、想い出したのが娘の存在だ。嫁いだとはいえ私の娘である事は違くない。

私はその不器用な手で娘にメールを打った。たった80文字ほど入れるに20分ほど時間が掛かつた。それから数日後、駅前の喫茶店で娘と待ち合わせた。娘が来るまで私は既に一杯の

珈琲を飲み干していた。こんな光景、何処かであつたような・・・  
・・記憶を辿ると。

それは妻と結婚する前、よく喫茶店で待ち合わせた光景によく似ていた。それから30数年の時を

を経て娘と待ち合わせするとは不思議なものだ。

娘が喫茶店に入つて来た。まるで30数年前の妻が現れたような、良く似た容姿をしている。

若き日の妻を想い出し、それを娘と重ね合わせドキドキする自分がいた。

「お父さん久し振り。どうしたの？ ニヤニヤして気持ち悪い！」  
「何を言っている。親が気持ち悪いってどう云う事だ。それよりまだ孫を見れないのか」

「もうー、ふた口目にはそれなんだから。それより話つてなあと」  
「実は俺、退職する事に決めただ。で、今更ながら母さんに苦労かけたと思つてな。この際  
母さんに喜んで貰いたいのだが、サツパリ分からのだよ」

「あらあ、お父さん。そんな優しいところがあったの？ 新しい発見だわ」

「こら！ 親を茶化すんじゃない。真面目に応える」  
「そうねえ、間もなくバレンタインデーよ。でも今は逆チョコとか逆バレンタインが流行つてるのよ」

「何？ 逆バレンタイン。誰がそんな都合のいい事を考えたんだ」  
少し大きな声で言ったものだから、周りの席の人に聞こえたのか苦笑している人もいる。

娘は思わず、しかめ面をして口許に人差し指を立てシツといった。  
「そうね。お母さんの喜ぶ物・・・まさかチョコレートと言う訳にも行かないし、真心のこもった物を  
プレゼントすればいいんじゃない」

「真心のこもった物？ それつてなんだよ」  
「お父さん！ 何を娘に甘えているの、真心とは自分で考えるものよ。じゃあ又ね」

「あつ！ コラア、もう帰るのかよ。もうちつとも役にたたない娘だ」

そうは言つたものの、娘の一言で閃くことがあつた。私は喫茶店を出ると旅行会社に足を向けた。

そして今日は2月14日 バレンタインデー

妻にプレゼントするなんて何年振りだろうか、それだけ私は妻を  
ないがしろにして来た証かもしれない。  
ない。今日はせめても罪滅ぼしに、妻に贈る逆バレンタイン。

私はいつでもなく緊張していた。まるで恋人に、プレゼントする  
ような心地で妻に声を掛けた。

縁側の庭が見える10畳ほどの和室に、妻を向かえ座卓を挟んで  
座った。

「貴方、改まってどうしたの？」

「いや別に改まってなんかいないよ。娘から訊いたんだが最近で  
は逆バレンタインってのが流行  
っているそうじゃないか。それなら俺も流行に遅れないようにと思  
つてさ。ほら、これプレゼント」

私はA4サイズの封筒を妻に渡した。妻は怪訝な顔をして封筒か  
ら取り出した。暫くしてその中身  
を見終えて目頭を熱くしていたが、やがてそれも堪えきれず声を出  
して泣き出した。

私が考えたプレゼントとは33年前新婚旅行で行ったルートだっ  
た。東京湾埠頭から船に乗って

宮崎から九州を廻ったコースだ。

「貴方、ありがとう。何よりも嬉しいプレゼントよ。あの日に戻  
ったような気持ちよ」

「そうか、俺達の結婚生活はここから始まった。もう一度原点に  
返ってやり直すのもいいかと思っ

てな。これまでお前には世話になった、これからは俺が一生賭けて恩  
返しをするよ」

了



(後書き)

ほのぼのとした家族とは？ 失われてはいないか？  
バレンタインデーに合わせて、作りました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1532g/>

---

「妻へ贈る逆バレンタインデー」

2010年10月10日13時44分発行